

## 【研究ノート】

質的調査と時間の哲学  
双葉町のフィールドワークからQualitative Research and Philosophy of Time:  
Fieldwork in Futaba Town高山 真<sup>†</sup>

## 1. 文学社会学の視点から

震災から10年が経とうとする頃に福島県の大葉町を訪れた。それまでに取り組んできた長崎被爆者を対象とする質的調査とのかかわりを強く意識していたわけではないが、大葉町を訪れ、津波により家屋が流され、原発事故により帰還することが困難になった土地を歩くなかで、長崎において被爆者の調査に取り組んできた意味にはからずして出会う感覚を有した。私が大葉町という場所を考える際の出発点になる経験である。

大葉町をはじめて訪れた際には、富岡町で被災を経験した女性の語りを聞いた。録音は行っていないため、フィールドノートをとてがかりに思い出すことができる範囲で語りの内容を記載しておきたい。語り部として被災経験と避難生活をとおして考えたことを、スクリーンに投影した写真を使いながら数人の聞き手にむけて、ひとつひとつの出来事を言葉にして語り伝えようとする様子が印象に残っている。たとえば、原発の危険性については被災前から意識していたこと、事故が起きた際にはどのように避難するかについて家族と話し合っていたこと、避難生活をとおして多くの人にお世話になったこと、避難生活をつづけるなかで一時的に富岡町の住まいに戻ったときに感じたことなどが語られた。おそらく富岡町の夜ノ森のことを話されていたと思われるが、かつての住まいの状況を見たときには悲しい思いをした一方で、よく歩いた桜並木は、そのときも花を咲かせていたことに触れられた。

こうした被災後の生活について「自分の人生ではない、借り物の人生を生きているように感じた」と語られたことが、当時の私にとっては印象的であった。借り物の人生を生きているという言葉で表現せざるをえない、そのような切実な経験を、私はこれまでの人生では体験したことはない。しかし、長崎被爆者を対象とする質的調査に長く取り組んできた〈わたし〉にとって、富岡町の被災者の語りを聞く体験は、長崎の調査で探求した「語りえないもの」と物語行為の関係をライフストーリー研究の方法から明らかにするというテーマとは異なる問題が、大葉町という場所にはあることに気づく契機となったのではないだろうか<sup>1)</sup>。この点については、吉原直樹による大熊町のフィールドワークにもとづいたエスノグラフィとの関係で後述することにした。

その後、2022年の春から大葉町に通うようになった。大葉町の現在の状況を知り、被災者の語りを聞いて

---

<sup>†</sup> 立教大学社会学部助教

いくなかで、さきほどの語り手による「借り物の人生を生きている」という言葉の意味を考えることもある。借り物の人生ではない、自分の人生を生きるとは、どういう状態にあることを指すのだろうか。そこには、人が生きていくなかで経験する時間という問題が介在しているようにも思われる。

いわゆるライフストーリー研究には、語り手により経験された主観的な世界を言語により表現する行為を対象とし、主観的な世界観が他者といかに共有されるかを探求しようとする傾向があるように思われる。こうした方法論は、たとえば「復興」という問題を考える際には、どのような可能性と限界を内包しているのだろうか。この点について、文学社会学の視点から語りの問題を考察する鈴木智之による論考を参考に考えてみたい。

双葉町を訪れるなかで「復興」という問題を考えないわけにはいかないが、この問題は、どのような視点から双葉町という場所を「物語る」ことができるかという問いにつながっていくのではないだろうか。鈴木は、東日本大震災の被災者の語りを聞く経験を契機として南相馬市小高区に移住した作家の柳美里による演劇の実践を考察するにあたり、つぎのように問いを立てている。

すべての出来事は、起こってしまった後には決してそれ以前に戻ることができないという意味で、取り返しのつかないものである。したがって、私たちは常に「出来事の後」を生きている。これは、不可逆的な時間を生きている限り逃れられない事態であるが、幸いにも、そのことが大きな問題として体験されるのは稀である—「日常性」とは、その「取り返しのつかなさ」が問題化しない形で推移することを指すのだと言えるだろう。だが、時として、出来事の後になお生活を営まなければならないということが、苦しみとして立ち現れる。この時、「その後の生」はいかにして可能となるのか。そこにどのような「時」を形作ることができるのか。(鈴木 2020: 33)

先述のように、双葉町で震災の語り部を聞くなかで、長崎被爆者の語り部を聞いたときに感じるもののなかった感覚があるのだが、ここに引用した鈴木の問いは、その感覚を明瞭に言語化しているように思われる。長崎における被爆者の語りは、核廃絶あるいは平和教育という文脈との関係で語られる傾向が強くある一方で、震災の語りには、特定のメッセージに語りが集約される傾向はないように思われる。

後述するように、筆者が双葉町のフィールドワークをとおして出会った、ある語り手は、震災以前の生活の場所である双葉町浜野地区で行政区長を務め、現在は語り部に取り組んでいる。いうまでもなく、双葉町の復興という問題を考える際に被災者の語りに焦点を定める質的調査には重要な論点を提示する可能性がある。ただし、長崎被爆者調査で採用したライフストーリー研究という方法については、双葉町のフィールドワークを進めるなかで、ある限界に直面するように思われる。

たとえば、ライフストーリー研究の視点から双葉町の復興という問題にアプローチするなら、経済的復興を推進する福島イノベーションコースト構想の一環として設置された情報発信の拠点となる施設でおこなわれる「語り部」の語りを、被災者ではない「よその」の私はどのように聴くことができるか、という問いが浮上するだろう。しかし、こうした問いは、吉原直樹が鷺田清一による「聴く」ことをめぐる論考の正確な分析から導き出すように「静的」かつ「規範的」な問いである(吉原 2021: 221-2)。

具体的に考えてみよう。語りと社会的コンテクストの関係を読み解くと同時に、相互行為としてのインタビュー

一のプロセスを解釈することはライフストーリー研究の基本的な視座である。実際に双葉町を訪れて語りを聞いていくなかで、こうしたふたつの視点から成り立つ解釈の枠組みでは捉えることのできない問題があることに気づく。その問題とは何か。冒頭に紹介した富岡町で被災した女性の語りは、問題の在在を端的に示している。鈴木が主張するように「だが、時として、出来事の後になお生活を営まなければならないということが、苦しみとして立ち現れる」という「取り返しのつかない」状況を生きるなかで紡ぎ出される言葉が、「借り物の人生を生きている」という言葉なのではないだろうか。

鈴木的主張は、「その後の生」を可能にする、どのような「時」を形作ることができるのかという点にある。その「時」は物語との関係で形成されるものであろうが、考察の対象は言語行為に限定されない点に注意する必要があるだろう。被災者にとって、震災後の人生を生きるなかで、このような「時」をいかに形作るかという問題が切実であることはいうまでもない。それでは、質的調査という方法でフィールドに入り、他者の語りを聞く者は、そのような「時」の形成にどのようなかたちでかかわることができるのだろうか。

## 2. あらたな語り手との出会い

震災と原発事故による被害を受けた双葉町のフィールドワークをつづけるなかで、震災まで植木職人として双葉町に暮らし、現在は福島県須賀川市に暮らす高倉伊助さんと出会った。双葉町は福島県浜通りにある小さな町である。請戸漁港も近く、伊助さんによると、かつては漁業を生業の中心とする町であった。東日本大震災以降、双葉町は、津波の被害だけではなく、原発事故に伴う放射能被害により人が居住することができない期間が長くつづいていたが、東日本大震災・原子力災害伝承館（以下、伝承館）が開館するなどして、現在では人の往来も増えつつある。

私が双葉町に通い始めたきっかけも、伝承館の開館を知ったことにある。伝承館では休館日をのぞいて毎日、2人の方が語り部として被災の体験を語っている。語り部は、午前と午後の部に分かれており、ひとりの方が、1日に2回の語り部を行なっている。およそ30名の方が語り部に取り組んでいる。伝承館の語り部による語りを聞くことを主な目的として双葉町に通い、全体の半数近くの語りを聞いている。

先述のとおり、はじめて双葉を訪れたのは伝承館が開館した2020年10月21日である。この年の3月14日に常磐線の富岡と浪江の不通区間が復旧し、双葉駅も震災前の駅舎の一部をコミュニティセンターとして活用するかたちで新しくなっている。上野から双葉まで常磐線を利用すると、片道3時間半ほど要する。いわきと双葉の間を結ぶ列車は本数が少なく、双葉駅にあるコミュニティセンターを列車が到着するまでの待ち時間として利用する訪問者も多い。

コミュニティセンターを拠点にまちづくりに取り組む「ふたばプロジェクト」のスタッフの方と話しをしているときに「この町は少しずつ変化している。2週間に1回のペースで来ると、その変化がわかると思います」と教えていただいた。この頃から、2週間に1回ほどの割合で双葉町に通うようになった。

スタッフの方の言葉のとおり、春の時点では建設中であった駅前町の町役場が徐々に完成していき、それに合わせるように、駅の近くを流れる前田川にかかる橋のたもとのアパートが改修工事を行うようになり、復興ロードと名づけられた伝承館と双葉町産業交流センターまでを結ぶ道路沿いにもアパートが新築されている。ま

た、中野地区に進出する企業の事業所や工場も建設されている。

たしかに、町は変化している。町の変化の様子を事後的にも確認できるように、双葉町を訪れた際には写真を撮る。双葉町に通いはじめた頃は、地震により傾いた家屋や、震災と津波の傷跡であろうと想像させられる対象を撮った。目に見えない放射線による被害を視覚化するモニタリングポストを撮ることもある。中野地区に進出した企業の外壁には相馬野馬追をモチーフにしたグラフィティアートが描かれている。

駅前の家屋に描かれた数々のグラフィティアートは、はじめて双葉町を訪れる者にインパクトを与える。コミュニティセンターにおかれている町案内のパンフレットによると、三軒茶屋で飲食店を営む双葉町出身の方がグラフィティのアーティストと親交があり、町の活性化の一環として行われている。こうした風景から考えることも多い。

たとえば、あるグラフィティでは、車に乗った二人の男女が、震災の傷跡はみえない双葉駅前ロータリーを見つめ、男は前方を指差し、その車のナビには「MAR 11 2011 14:46」「MAR 11 2021 14:46」「MAR 11 2031 14:46」という3つの時刻が表示されている。震災の時、震災から10年後、震災から20年後の双葉町を見つけていこうという意志が表れているように感じられる。10年という時間の単位は、双葉町に暮らした人々にとって、被災の経験を考えるうえでの指標とされているのだろうか。

伝承館の語り部として、震災当日の双葉町浜野地区の津波の被害と避難状況、その後の生活をとおして考えたことを語りで伝えようとする伊助さんと知り合ったのは、このように伝承館に通いつづけるなかでのことだった。伊助さんは、語り部を終えた後で、個人的に話をする時間をとってくれることもある。伝承館のすぐそばにある、かつての暮らしの場所を見つめながら、「これから10年で、この場所が変わっていけば、その先も変わるだろうし、それまでに変わらなければ、その先も変わらないだろう」と語る。「目の黒いうちは、変化を見つけていきたい」と語る伊助さんの真剣な表情が印象に残っている。

### 3. 「対話」という枠組みの限界

伝承館の語り部をめぐるのは、伝承館が開館して間もない2020年9月23日の朝日新聞(朝刊)において「特定の団体、個人または他施設への批判・誹謗中傷等」を「口演内容に含めないようお願いします」と記された「活動マニュアル」が配布されたと報道されている。この記事によると、来館者との質疑応答の際には「口演者が回答することが適当ではない質問はスタッフがフォロー」と記載されている。

2020年10月に伝承館を訪れた際のフィールドノートには、スタッフが語り部の隣りに立ち、語り部の語りのあと、スタッフから「質問を受け付けます」という促しがあり、来館者の質問に語り手が答えるかどうかをスタッフが考えたうえで「答えてください」と語り手に促す過程について、長崎被爆者の語り部の調査経験との関係で記録している(高山 2021a)。

2022年の春から継続的に伝承館に通うようになってからは、2020年10月の訪問の際にうけた印象と比較すると、スタッフは語り手の紹介と質問を受けつける進行の役割にとどまり、語り場の管理されている印象は薄れている。ただし、開館当初に報じられた記事が調査の継続にあたる影響は少なからずあるかもしれない。長崎の語り部を対象とする調査を始めた当初は、原爆資料館で実施される被爆体験講話を聞くことから

調査に着手したが、その時よりも、伝承館の調査では語り手と個人的に話すことはむしろかたがたに感じる。

こうした語り部の営みを取りまく組織の考え方を提示する文書や、それを報道するメディアの言説が、調査者と語り手との関係の形成にどの程度まで作用するかについては、今後の調査の進展を見守るほかない。現段階では、2022年4月から語り部を聞かなかで、個人的にお話をさせていただき関係を形成している方が、伊助さんであるというフィールドワークの現実を重視したいと考えている。

長崎の語り部を組織する長崎平和推進協会においても語り部の語りを規制する趣旨の文書が配布されたと報道されたことがある。こうした出来事は、個人の語りを社会的な文脈との関係で解釈する際には重要な意味をもつだろう。語り部を継続的に調査すると平和教育の担い手として語り部に取り組む人々の語りに顕著にみられるように、「上から」の規制により、語り手が「なぜ体験を語るのか」という問題意識をより強固にする場合もある(高山 2016)。伝承館の語り部を聞いているなかでも、東京電力の責任を明確に問う語りを展開する語り手もいる。

伊助さんの語りは8回ほど聞かせていただいているが、ひとりの語り部を繰り返して聞くことは、以前に取り組んでいた長崎被爆者を対象とする調査でも行なったことである。長崎の調査の主要な協力者である3名の語り部については個人的なインタビューだけではなく、語り部としての体験講話を何度も聞かせていただいた。その意味では、現在の双葉町のフィールドワークで行なっていることと、長崎のフィールドワークで行ったことは同じことのように思われる。

しかし、双葉町に通うなかで、長崎の調査では意識しなかったことを考えていることに気づいていく。そのひとつには、語り部の変化という問題がある。伊助さんは、語り部として、震災から数日の間に体験したこと、とくに、同じ地区に暮らしていた人たちのなかで助けることができなかったことにたいする思い、震災後の生活をとおして考えたこと、そしてこれからの双葉町について語ることが多い。

伊助さんは語り部として、基本的には3つのことを語るのだが、日によって、3つのテーマにおかれる重心は変わってくる。あるいは、おなじことを語っていても、語りながら現れる表情の変化や、語りとともに伝わってくる感情の起伏は、聞くたびに異なる印象を与える。双葉町に通いはじめた頃には予想もしていなかったことであるが、伊助さんの語りを聞く時間は、私が双葉町に通い、長崎被爆者調査の記憶を想起し、かつて取り組んだ長崎の調査と双葉町という場所について考えるにあたって核となる問いを形成しつつあるように思われる。

メキシコのチアパス州チャムーラに通う歴史学者のフィールドワークから多くを学んだ保莉実が「歴史実践」と呼ぶように、フィールドとなる土地を訪れて、まずは、その土地に身を置き、そこで出会った人の語りを聞きつづけるなかで、はじめて、自分自身が何を問おうとしているのかが見えてくることもある(保莉 2004)。長崎の調査においても、こうした出会いはあったはずだが、2022年10月10日に伝承館を訪れ、この日も、伊助さんの語りを聞きながら、私は、それまでには体験したことのない「語りに出会う」という出来事を経験した。

その経験のありようを正確に再現しておきたい。伊助さんの語り部は、それまでにも何度も聞いているため、ひとつひとつのエピソードで指示される出来事については知っているはずである。しかし、複数のエピソードが、ひとつのかたちを伴い自分自身に近づいてくる感覚を覚えるのである。この感覚は何だろうか。長崎の調査で出会った被爆者であれば「追体験」と表現するかもしれない。しかし、その時の経験は、追体験という言葉が意味する他者の痛みを自分の痛みとして内面化する感覚とはまったく異なる類の経験である。

いささか唐突に思われるかもしれないが、こうした問題を考える際に、歴史学者の阿部謹也による『自分のなかに歴史を読む』のなかに興味深い記述があるので紹介しておきたい。阿部は「解るとはどういうことか」という問題を自らの学究の人生を振り返る中で考察している。阿部は、学生時代を振り返りながら「自分」の歴史を書くなかで「解る」とは「それによって自分が変わること」ではないかと指摘する。

私は一人の人間が他の人間を理解する、解るとはということなのかをずっと考えてきました。そしてそれを理解するということは、その人のなかに自分と共通な何か基本的なものを発見することからはじまるのだと考えるにいたったのです。(阿部 2007: 109)

その人のなかに自分と共通な何か基本的なものを発見するという感覚は、2022年10月10日の語り部を聞いた際に生じた感覚に近い。伊助さんという双葉町に生まれ育ち、植木職人としての時間を生きてきた方の経験的な語りを聞きながら、いかなる「共通な何か基本的なもの」を発見したのだろう。その発見は、長崎被爆者の経験的な語りを聞いてきた〈わたし〉の経験とどのように重なるのだろうか。

直観的な言い方になってしまうが、こうした経験の重なりの様相を明らかにしようとするときに、インタビューという方法の有効性にたいして懐疑的にならざるをえない。相互行為としてのインタビューの方法論に付される「対話」という言葉が内包するある種の「規範」は、ここに記述しているフィールドワークの経験とは遠い関係にあるように思われるためである。伊助さんの語りを聞きながら感じたことは、対話をとおして相手を理解するという認識枠組み(規範)を内側から突き崩すような経験であるのだろう<sup>2)</sup>。

伊助さんは双葉町に生まれ育ち、17歳まで双葉で暮らした。17歳のときに、東京の赤坂に植木職人としての修行にでる。赤坂での10年間の修行を経て、ふたたび双葉での生活に戻った。

双葉では植木屋と田んぼを生業とした生活をつづける。震災の前年まで浜野地区の消防分団長を担っていた。東日本大震災を経験し、須賀川市に避難するが、赤坂で働いていたときの会社から声をかけていただいて東京に戻り、赤坂で植木の仕事をつづけた。津波で亡くなった人、助けることができなかった人のことが頭から離れず、眠れない日も多かった。

それから7年が経ち、双葉町浜野行政区長への就任を依頼される。震災の当日、避難を呼びかけたが応じてくれなかった年長者もいたことを思い出した。結果的に亡くなった方、行方不明の方もいるなかで「また顔みたら殴りかかってしまうかもしれね」という思いもあった。

こうした葛藤もあったが、この土地に政治家として暮らした5代前の先祖から「伊助」という名前をもらったことを思い、妻とも相談し「これもなにかのけじめではないか」と考え、行政区町を引き受けるようになったと伊助さんは語る。いまは須賀川市から片道2時間半をかけて週に2回の頻度で双葉町に通っている。伊助さんと私が出会ったのは、震災から10年が経ち伝承館の語り部として伊助さんが体験を語るようになってからである。

#### 4. 長崎被爆者調査の経験と、伊助さんとの出会い

吉原直樹は双葉町の南に隣接する大熊町のフィールドワークをつづけている。東京電力福島第一原発は双

葉町と大熊町の境界にある。吉原は、フィールドワークをはじめから5年が経過した時点で、被災者と「私たち」の関係について、つぎのように述べている<sup>3)</sup>。

確認しておかなければならないのは、ポスト3.11にたいする私たちの絶望や失望は、被災者の絶望や失望に代わるものではないということである。私たちがポスト3.11の現実を前にして黙り込んでしまう。それはオオクマ(大熊)の人びとが言葉をなくしてうずくまってしまっているのとは違う。かれら／かの女らの沈黙には、自分たちの生活を根こそぎにし、不条理そのものとしてある現実へのくすぶった怒りが渦巻いている。それにたいして、私たちの沈黙には、あくまでも「他者」としてそうした現実を批判することに伴うある種の「うしろめたさ」がつきまとっている。つまり同じ沈黙といっても、被災者のそれと私たちのそれは、きわめて非対称なものとしてある(吉原 2016: 12-3)

かつて双葉町で暮らしていた伊助さんの語りを聞きながらフィールドワークを進めていくうえで、大熊町の調査に取り組んでいる吉原の指摘が何を意味しているかを確認しておくことは重要であろう。長崎被爆者を対象とするインタビューに取り組むなかで、私自身、吉原が指摘する論点と、基本的には、おなじ問題を考えてきた。それは、調査者と協力者(被爆者)との非対称な関係性をいかにとらえ、その非対称な関係のなかで継続されるインタビューのリアリティを記述の位相でどのようにクリアしていくかという問題である。

この問題を被爆からおよそ20年後に長崎で考えたのは社会学者の石田忠であった。石田は、長崎被爆者である福田須磨子との関わり(生活史調査)のなかで、社会学者としての自らの立場について考えた。石田忠もまた、福田に出会った際に生じた感情を「何かしらうしろめたい気持ち」と表現している(石田 1973: 15)。

こうした被爆者にたいする感情は、私が取り組んだ長崎調査にも、その初期の段階で生じていた。長崎被災者協議会の事務局で谷口稜暉さんとお会いしたときに、その後の長期的なインタビューを依頼する被爆者とは異なるある種の雰囲気を感じた。谷口さんは背中大きな火傷を負った被爆者であり、長崎原爆資料館には彼の写真が展示されている。谷口さんは、語り部に取り組む被爆者から「第1級」の「有名」な被爆者と呼ばれることもある。谷口さんに面会を申し込み、お会いしたときには、彼の語りにたいして意見や疑問を口にするのをためらわせる雰囲気をまとっていたことが印象に残っている。

長崎の初期調査を振り返ると、谷口さんのような「有名な被爆者」に聞き取りをすることは困難であり、仮にそうしたところで調査をとおして探求したい問いからは離れていくように感じたため、その後のインタビューの協力者にはならなかった。

それでは、長崎調査で考えた問題の焦点はどこにあったのだろうか。その問題の所在を明瞭にしておくことは、これからの双葉町でのフィールドワークをつづけていく上でも重要であると思われるため整理しておきたい。まず、私が長崎の被爆者である M さんにインタビューを依頼し、結果的には、3名の被爆者との長期的な対話のなかで、とりわけ、彼との関わりが私の調査において重要な役割を果たした理由を考える必要があるだろう。

彼は、長崎被爆者のなかでは、いわゆる「第1級」の「有名な」被爆者ではなかった。彼は、被爆者のなかでは

爆心地から比較的離れていると認識される4.3キロの小菅町で被爆し、その後の人生を歩むなかで、爆心地の近くで生き延びた人たちの語りを聞くなかで被爆者としての主体性を形成したと自己を物語る。これまでの議論との関係でいえば、たとえば福田須磨子のように家族を失い、大きな外傷を負い、彼女自身、その生を「漂流」と呼ばざるをえない状況に置かれた被爆者が、自らの運命と対峙するなかで反核の意志を形成し、石田が「抵抗」と名付けた主体性を獲得するという被爆者の典型とは異なる存在なのである。

こうした被爆者との対話から見えてくることは、実際に被爆を体験している者であっても、他者として被爆者の置かれた現実を批判する立場に身を置くことがあるという現実である。自らの経験を他者として批判的に見つめるということは、はたして、どのようにして可能になるのだろうか。語り手としてインタビューに応じたMさんは、他者の語りを聞くことに伴う自己(物語)の変容という枠組みで説明している点については、すでに検討している(高山 2016)。

前節では、双葉町で出会った伊助さんとかかわりのなかで生じる感情経験に触れたが、こうした経験もまた、吉原が指摘するところの「他者」として現実を批判することにたいする「うしろめたさ」にかかわるものであるのだろうか。私自身は、双葉町に通うなかで、現実にたいする批判を行うことのむずかしさを感じている。また、伊助さんの語り部をくりかえし聞いている限りでは、現実にたいする批判的な語りが前景化する機会は少ない。現段階での印象にすぎないが、伊助さんの語りは、どこかで自分自身に向けて語られているようにも感じられる。

長崎被爆者である M さんのライフストーリーを聞きながら「被爆者になる」という語りの解釈をとおして考えたことは、生存者としての主体性の形成に伴い生じる、主観的な自己の把握と客観的な自己の把握の双方向から経験的な語りが織りなされていく物語りのプロセスを、調査者として聞き取りの場にあわせる者はどのように追体験することができるかという問題であった。こうした調査経験は、双葉町で震災、津波、原発事故による放射能被害を受け、もとの暮らしには戻ることができなくなった後に、そうした出来事の後に、なお生活を営まなければならない状況を生きる伊助さんとの出会いを考える際には、どのような役割を果たすのだろうか。

## 5. 「時」を形成するフィールドワークに向けて

1節で紹介した富岡町で被災した女性の語りに戻りたい。今年の春から伝承館に通いつづけるなかで、彼女の語りをふたたび聞いた。

止まっていた時計が、ひとつ目盛りを刻んだように思います。

彼女は、おそらく2年前には語っていなかったであろう、この言葉を明確に聞き手に届けている。双葉駅前のコミュニティセンターに常駐する女性が語るように、この町は変化している。

ただし、吉原直樹が指摘するように、大熊町ではイノベーション・コースト構想により新産業と新技術にいざなわれた「廃炉産業の町」の前進基地としての役割を担うようになり「被災者の内的な感性／感情を無視」する形で復興が進められている現実がある(吉原 2021: 52-4)。吉原が主張する「小文字の復興」の可能性を論

じること自体が困難な状況に直面しているのではないだろうか。わずか半年あまりのフィールドワークではあるが、筆者も双葉町の状況を見るなかで、個人史、生活史、ライフストーリー研究という生きられた個人の経験に焦点を定める方法論を用いた調査を実施すること自体の困難に直面している。

しかし、こうした状況だからこそ、その状況を逆説的に捉えるフィールドワークの可能性もあるのではないだろうか。ここで、野家啓一が提唱する6つの歴史哲学テーゼのなかから、ひとつのテーゼを検討しておきたい。サントリーテーゼと名付けられた第5テーゼは「時は流れない、それは積み重なる」である。積み重なる時間とは、歴史を記述するわたしたち自身が内属する「現在」という横断面に、雪のように絶え間なく降り積もり続ける時間であり、流れ去ることなく「現在」の地表の各所に露出する時間である(野家 2005: 183)。これからの双葉町のフィールドワークの記述をとおして形作る「時」は、歴史を記述する〈わたし〉が内属する積み重なる時間ではないだろうか。

伊助さんの語り部を聞いた、ある日、伊助さんは、帰り際に「請戸小学校いくか。俺のバイクに乗せていく」と声をかけてくれた。震災から11年が経過し、当時の状況を想起するてがかりは語り部の語りにしかないと感じていたが、遺構として保存されている請戸小学校を訪れたとき、現在、伝承館で語り部に取り組む当時の請戸小学校の児童であった語り手によると思われる作文を読み、伝承館で聞いた「請戸小学校物語」と題された震災紙芝居の朗読による集合的記憶の想起がふたたび生じていることに気づいた。

被災した経験を「わたし」の体験として語るのではなく、集合的な(小学校の教員と児童の)経験として紙芝居を作成し、その紙芝居を朗読する語り部のスタイルは、長崎の語り部には見られなかった。この語り部を聞いたときには新鮮な印象を受けたが、請戸小学校を訪れることにより、実際には津波被害を体験していない者も、過去を想起し、「その後」の時間を共に形づくる可能性があるように思われる。

積み重なる時間とは、ひとりの人間が孤独に過去を想起する感傷的な状況を指すのではない。そうではなく、世代を超えて、すでに他界した者を含めて、他者とのかわりのありようを想起し、想起をとおして私たちの前に現在する時間を見つめつけていく生き方を指すのではないだろうか。そうであるならば、積み重なる時間の具体的なありようを探求する質的調査をつづけることが、伊助さんをはじめとする双葉町に生きる人たちとのフィールドワークの指針となるだろう。

## 注

- 1) 筆者はフィールドワークの記述において調査者の自己を、すくなくとも2つの位相で捉えている。ひとつはフィールドにおいて他者との関係のなかで現れる〈わたし〉であり、もうひとつはフィールドワークを記述する主体としての「私」である。長崎被爆者の語りを解釈的に記述するなかで、フィールドワークの記述に〈わたし〉という主体を登場させるという着想に至った。本稿においては、双葉町を訪れることにより長崎原爆被災の記憶をテーマとする調査経験の変容をとらえる視点として〈わたし〉という仮設的な主体を記述に取り入れている。こうした質的調査の記述に関する問題については、ライフストーリー研究におけるオートエスノグラフィの位置づけという視点から検討している。(高山 2017、2021b)を参照。
- 2) 倉石一郎は(高山 2016)の書評論文において、その記述のあり方を「逆説的フィールドワーク」と指摘する(倉石 2016)。倉石は、質的調査論やフィールドワーク論に見られる「分からないことは当事者に聞けばいい」という〈順接性〉の関係で協力者をつなぎ、「当事者を尊重し、そこから学ぶ姿勢」を前提とした調査論のあり方を批判する。倉石によ

ると、調査者は「何の因果かわからないが気づいたらここ(当事者)の前にはいたのだ」という逆説的な関係で協力者と繋がっている点に自覚的であることが重要になる。長崎被爆者調査における調査経験の記述の再検討は、倉石による質的調査論のメタ理論と方向性を共有している(高山 2021b)。

- 3) ここで吉原が指摘する調査者と協力者の非対称性の問題が質的調査論において重要な論点となることは間違いないが、こうした議論の前提にある正しさ(規範)については慎重に検討する必要があるだろう。石田忠の反原爆調査では、社会学者としての「立場」を固定的に記述し、調査研究の前提とされているが、筆者は長崎のフィールドワークをつづけるなかで、こうした前提で実施する調査のあり方に違和感をおぼえてきた。その違和感の所在については、解釈枠組みと個人の経験的語りとの関係という視点から石田の調査を再検討している(高山 2022)。歴史の物語論を理論的背景とする相互行為としてのインタビューには、こうした規範からある程度の自由を得る利点があると思われるが、こうした理論的立場をとる際には、歴史を物語る論理と倫理の関係をいかに考えるかというテーマがあらたに浮上するだろう。

## 参考文献

- 阿部謹也, 2007, 『自分のなかに歴史をよむ』筑摩書房。
- Halbwachs, M., 1950, *La Memoire collective*, P.U.F.(=1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社。
- 浜日出夫, 2007, 「記憶の社会学・序説」『哲学』No.117, pp.1-11.
- 保莉実, 2004, 『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房。
- 石田忠, 1973, 『反原爆 長崎被爆者の生活史』未来社。
- 倉石一郎, 2018, 「〈逆説的関係〉でつながるフィールドワークの力」『支援』生活書院刊(8)pp.239-45.
- 野家啓一, 2005, 『物語の哲学』岩波書店。
- 鈴木智之, 2020, 「出来事の後で日常を生きるということ 柳美里『ある晴れた日に』における時間の形象」『社会志林』67巻, pp.33-53.
- 高山真, 2016, 『〈被爆者〉になる 変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』せりか書房。
- , 2017, 「ライフストーリーとオートエスノグラフィ」『哲学』No.138, pp.41-59.
- , 2021a, 「無辜の死」『応用社会学研究』63巻, pp.169-74.
- , 2021b, 「サバイバーズ・ギルトを再考する ライフストーリーとメタ・オートエスノグラフィ」浜日出夫(編著)『サバイバーの社会学 喪のある景色を読み解く』ミネルヴァ書房。
- , 2022, 「記憶の社会学と質的研究」『応用社会学研究』64巻, pp.221-30.
- 内山節, 2011, 『時間についての十二章 哲学における時間の問題』岩波書店。
- 吉原直樹, 2021, 『震災復興の地域社会学 大熊町の一〇年』白水社。